

向き合うまでもない、 アジアはもう結ばれている

谷口智彦

『日経ビジネス』主任編集委員
アジア戦略会議メンバー



今回のシンポジウム参加者51人から回答を得たアンケートの結果は、日本が自らを開く必要を訴えている。87%と圧倒的多数が、「もっと」日本を開かねばならないと考えていた。

だが「国を開く」とは具体的にどうすることか。なぜ開国しなければならないのか。4人のパネリスト、次いでコメンテーター3人を得て進行した、セッション1『アジアの変化に日本はどう向かい合うべきか』ではそれらが論じられ、設問自体が時代に追い越されているという合意を見た。「向かい合う」相手は自分と異なる対象物のはずだが、日本経済は既に、アジアと不可分に一体化しているからである。

最近の製造業は工程を細分し、モジュールを移動させるという特徴がある。各モジュールを最適立地に移動させ、全体の効率を上げようとする。討論で明らかにされた通り、中国はこのような新しい分業体制に参加することによって伸びた。また日本経済も、アジアに広がる分業と物流の網に深く自らを取り込むようになっていく。他者と「向かい合う」ことができるような切り離された状態は、現在の日本とアジアの間には、もはや存在していない。

どこか1国が車軸の役目をなし、諸国が

車軸を経由してしか結び合えない世界は、冷戦と共に去ったという認識が示された。だとすればネットワークの効果を存分に生かすことが、企業と国にとって大切になる。3点を結ぶ回線は3本しかないが、2点参加者が増えれば5者間をつなぐネットワークは一挙に10本となる。この効果を活用しなければならない。

問うべき問いはかくして、「日本は他者がネットワークを延ばしてきたくなるような国かどうか」というものになる。セッションでは1人を除き、すべて悲観派という結果が示された。日本に対する期待値が高ければ高いだけ、悲観的にならざるを得ないだろう。

日本企業なかんずくそのボード・ルームが外国人に門戸を閉ざし、東京が主要先進国の首都の中でとりわけ外国人にとって居づらいような街であるとき、日本はアジアで広がるネットワークに参入などできない。日本人自身の心の開放から始めるべきだと強調する意見があり、賛同を得た。また「キャビン・フィーバー」という印象深い言葉も紹介された。閉鎖された言語空間で互いの悪口ばかり言い合っている状態を指すという。日本は今、そういった状況に陥っていると論者は指摘した。このことは、

日本の言論がまさにアジアに対して開かれていないことの裏返しかもしれない。

ある種の野心的事業家にとってこの空間は、厳しい挑戦を避け無風状態に安住する事業家精神、それ自体の衰えと映る。アジアはチャンスとリスクが共に高い世界である。「事業家たるもの、そこで自らを鍛え直すべし」。そう述べた論者は、日本社会が御身大事の徹底的な小市民社会に成り下がったと喝破した。ここは日本の変化を肯定的に眺めようとする指向の強い米国人観察者にとって、うなずかざるを得ないところである。「まず意志が必要です。そして、肝っ玉と決断力が必要です」がその論者の指摘であり、過去に厳しいリストラをくぐり抜けてきた米国人の心意気である。

心意気なら中国人にもある。中国人の討論参加者は、日本人を清末の中国人になぞらえ、他の参加者の耳をそばだたせた。当時の中国は、GDPで恐らく世界最大であり、同時に世界一の輸出大国でもあった。しかし西欧との戦いに敗れ、いったん凋落の道をたどるや、孜孜として貯えてきた経済ストックは短期間で蒸発してしまった。それを繰り返したくないと思えばこそ、今、中国人は奮闘している。「日本よ、清末の中国人がなした愚を繰り返すつもりなのか」との指摘だ。

日本は既に、経済においてアジアとは離れられない関係を結んでおり、まずはそのことに対する認識が必要だとすれば、次には、できつつあるこのネットワークをもっと活力に富むものにするにはどうすればよいかという問いが生まれる。

この点で、欧州は先輩たるを失わない。「共通の事業、それもできれば共通の夢を追うことのできる事業で共に働くことによって、アジアのビジョンをつくれ」と、欧州から来ている討論者が指摘し、会場の支持を得た。エアバスのような共通事業でもよい。共に環境問題に取り組むのもよい。ここでは日本のビジョンの構想力が問われ、次いで、夢を語る言語の力が問われる。残念ながら日本にその能力はまだないとはいえ、始めるなら今をおいてないとの認識には、広い共感を得た。

「日本が将来に向けて活路を開く上で、アジアと一体化しつつその中でリーダーシップを発揮していくことは不可欠であり、日本にはその力がある」。こう考える人は、アンケートによれば全体の45%にも達する。これはむしろ「かくあらねばならない」という希望の表明として読むべき数字であろう。あきらめの心境に至るには程遠いとはっきりしたことは、セッションの活発な議論と併せ、今回のシンポジウムの成果だと言ってよい。